

いはまほしくなれば、あなをほりては、いひいれ侍りけめとおぼえ侍る。
〔徒然草^上〕おほしき事いはねば、腹ふぐる、わざなれば筆にまかせつ、あぢきなきすさびにて、
かいやりすつべきものなれば、人の見るべきにもあらず。

〔太閤記〕秀吉初て普請奉行の事

信長公きこしめして、猿めは何を云ぞ、何事ぞと問給へ共、さすが可申上義にあらざれば、猶豫し給へる處に、是非に申候へとて、かひなを取てねちかめ給ふ、有のまゝに申せば、宿老共を讒するに似たり、又申さねば君の仰を背に似たり、呼口は禍門なりと世の諺に傳へし事、今おもひあたりたり。

〔關八州古戦録^{十七}〕秀吉公湯本著陣事

小田原ノ本城へ荅^{ツホ}ミシカバ、氏政父子、畑湯本、石橋、米神へモ出張シテ、防戦ヲ遂ベキヤノ旨、評議セラレケル處ニ、松田尾張入道進ミ出テ、氣ニ乗タル大敵ニ向ヒ、後レ色付タル味方ノ勢、徒ニ打向テ敗北セバ、重テ有無ノ一戦叶フベカラズ、只先籠城有テ、守成堅固ヲ專トシ、敵ノ勞ヲ伺ハレ、然ルベシト申ケレバ、サシモノ諸將奉行頭人マテモ、直諫シテ巧夫ノ計略ヲ出シ、敵ヲ挫クベキ適當ノ貪著ナク、彼モ是モ手ヲ拱ヌキ、松田ガ吻而已ヲ守テ、虚々ト日ヲ送ケルハ、情ナカリシ次第ナリ、^{○中}サレバ其比關東ノ俚俗、果敢々々シカラヌ評議ヲバ、小田原談合ト云觸シテ、今ノ世マデノ常談ニ傳へ、此時ニ起レル事ナリトゾ。

〔松屋筆記^百〕船頭多くて山へ船を漕上る

俗に評議のまぢくにて、決せざるを、船頭が多くて、山へ船を擧るとも、又小田原評議ともいへり、^{○下}

〔明良洪範^{十五}〕此作左衛門多^{○本}三州ニ奉行タリシ時、法度書ヲ出サレシニ、農人一向用ヒズ、コレ